

ある想い

長友 和彦

大学は今、大学改革という激しい波に飲み込まれたまま、人も組織も出口の見えない閉塞状態にあるように思われる。共有できる将来構想の提示もない上からの改革がもたらす必然的帰結と言える。

その中で、時代を素早く先取りするような教育・研究のあり方のみが脚光を浴び、評価され、潤沢な財政的支援が得られるようになりつつある。それ以外のものは消されていくわけだから、取りあえず生き延びるために、評価する側に媚び、あたかも時代を先取りしたかのように見せかけたものを提示していったらいいという知恵も生まれてきた。

教育・研究が、客体化され、数量化されて、その有効性・有益性がいわゆる第三者に評価されるようになった。教育・研究にはそのような評価になじまない側面があるということ、大きな声で言いづらくなってきた。

しかしながら、と本郷先生との大学でのお付き合いを振り返って思う。

先生の大学人生の根幹にあったものは、おそらく、留学生との日々の出会いではなかったかと思う。留学生と常に同等の人間として対峙され、留学生の抱える悩みごとや問題には留学生と腕を組んで立ち向かっておられた。日本語のクラスには常に厳しい態度で臨まれていたが、そこが出会いの場であったからこそ、本郷先生に寄せる留学生のあの羨ましいほどの信頼も生まれ続けてきたのではないかと思う。出会いの中に先生の教育があったのではないか……。

出会いは偶発的であり、瞬時に光るだけのものかも知れない。しかし、その光は、人間の営みにおける永遠の価値を照らし出してくれるのではないか。本郷先生とのことを思い返ししながら、改めてそう思った。

出会いは、客体化や数量化の対極にあり、有効性・有益性とは無縁のものである。